

波瀬川流域の横穴式石室について

野田修久

はじめに

古墳時代後期より、古墳の遺骸埋葬施設として横穴式石室が全国的に導入されたことは、すでに常識となっていることである。また、古代社会における日本墓制史上の大きな変革のひとつとして、「高塚墓の出現」「火葬墓の展開」とともに、「横穴式石室の発達」ということがあげられる場合もある。^①そして、横穴式石室自体の研究も、平面プランや断面、石材等の観点からなされ、地域性が論ぜられたり、ひとつの古墳群（又は群集墳）の性格把握のために利用されたりしている。

当時の社会構造を反映しているとされる古墳に採用され、古墳時代後期において、地域的にも時間的にも普遍性を持つ横穴式石室の史料価値は、確かに高い。特に、ほぼ永久不変と考えられる石材を利用しているが為に、その構築場所が、その墓によって占有されるということが、「ある一定の土地をその墓地として永久に占有することが他の集団、または地方や中央の政治権力によって承認される状態があった」^②からだと考えると、石室の持つ意味は、我々にとってますます大きくなる。

そこでさっそく、伊勢湾西岸の中南勢地域に於ける横穴式石室の分

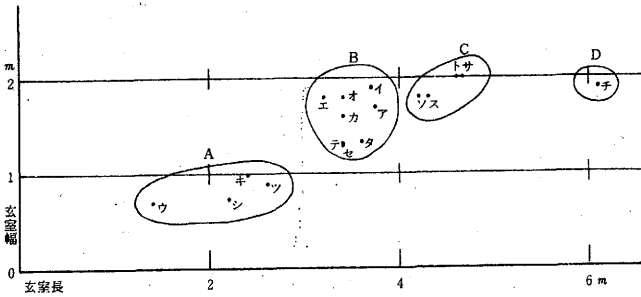
布を見てみると、そこには三つの集中地域があることがわかる。^③（もつとも、横穴式石室といっても、発掘調査されたものをはじめ、開口していたり、天井石が落ち込み玄室部が露出していたりして、はっきりそれと分かるものの他に、天井石らしきものが露呈していたり、石材が散乱していたりして、横穴式石室と推定されるものも含んでいる。）ひとつは、長谷山古墳群を中心とした、経ヶ峰の東麓、安濃川の上・中流域である。もうひとつは、雲出川流域、特に雲出川本流と、その支流である中村川にはさまれた地域である。三つめは、堀坂山東麓地域である。

今回研究の対象とした波瀬川流域は、この三つの集中地域のうち雲出川流域区に含まれ、その地域の地図的に見た中心部に当たる。

さて、これから本稿で、波瀬川流域の横穴式石室を比較検討し、それをもとに、若干の私見も述べたいと思う。比較方法としては、色々考えられると思うが、ここでは、「I」個々の石室を比べる」という方向性を持った方法と「II」古墳群単位での比較」という方向性を持った方法との二つを試みてみた。

古墳名	玄室			袖部		b/a	築造時期	石材石質
	長(a)	幅(b)	高	右	左			
ユガミ谷 1号	右 3.75	1.7	2.1	0.35	0.35	0.45	(6C代) (7C初頭)	粗粒砂岩
	左 3.65							
アイウエ 2号	3.7	1.9	0.55	0.32	0.40	0.51	7C前半	"
	3号	0.7		-	-	0.56		
下名倉 2号	3.2	1.8	2.4	0.15	0.35	0.53	"	"
	3号	1.8						
オカキ 4号	3.4	1.6	2.6	-	-	0.31	"	"
	5号	1.0						
クケコ 1号	4.55	2.0	2.6	0.40	0.50	0.31	"	"
	5号	0.75						
サシ 丸ヶ谷A-3号	2.2	0.75	2.6	0.15	0.30	0.42	7C前半	"
	A-5号	4.3						
スセ 上野山 10号	3.4	1.3	2.6	0.35	-	0.41	7C中葉	"
	11号	3.4						
ソタ 12号	4.2	1.8	2.6	-	-	0.31	7C前半	"
	13号	3.6						
ツ 葉師谷 2号	6.1	1.9	2.6	0.40	0.50	0.31	"	"
	6号	2.6						
テト 小 1号	3.4	1.4	2.6	0.35	-	0.41	"	花崗岩系石材
	A-1号	4.6						
ナニヌ A-2号		1.3	1.6	-	-	"	"	"
	A-3号							
B-5号								

〔表1〕 波瀬川流域の横穴式石室
 ○ bの値は奥壁部で測ったもの ○ ※印…発掘墳
 ○ 築造時期()は推定 ○ 単位 m



〔図1〕 横穴式石室玄室規模

〔I〕
 個々の石室について比較するといっても、なかなかその条件がそろわないのが現状である。すなわち、すでに石室の上部は破壊されており底石だけが残っているような状態であるとか、羨道部は土砂で埋まっているとかいうような石室が多いのである。しかし、そんな中で、玄室部の平面プランという要素だけは、数のうえでなんとか比較の対象となったので、それを中心に各々の石室を見ていくことにする。なお、各々の古墳や石室の概要については、すでに「一志町史」に詳しく④の④でここでは特別に項目を設けることは省き、必要に応じて説明を加える程度にしたい。

さて、この波瀬川流域の横穴式石室のうち、発掘されたもの、又は玄室部の石組みが一部でも観察できるものは二三基ある。それらに、現段階においてわかる範囲で比較要素を書き加えたのが表1である。
 そして、表1をもとにして、玄室の長さとの幅の関係をグラフ上に表わし、規模の類似性により、A・B・C・Dの四つにグループピングしたのが図1である。
 Aは、奥壁の幅が1mを越えないものであり、この地域において小型横穴

式石室と言えるもののグループである。平面プランを見ても、下名倉五号墳を除いては、無袖形態をとる。下名倉五号墳にしても、袖石は両側とも一五cmほどしか内に張り出していない。

Bは、玄室の長さが三・四m、幅が一・三・二m近くまでという、この地域では平均的な規模ではないかと思われるグループである。しかし、幅の長さに対する割合は、上野山一一号墳の〇・三八から、下名倉二号墳の〇・五六までバラつきが大きい。〇・三八は扱った資料中最小値であり、〇・五六というのは最大値なのである。ところで、このグループでは五基の石室について、その遺物より築造年代が推定できる。それによると、上野山一一号墳を除いた他の四基には六世紀後半から七世紀前半という時期が与えられ、^⑤ 県内の後期古墳の著しい造営期と一致する。上野山一一号墳は宝珠形つまみの須恵器杯蓋をその遺物に持ち、さらにそれより時期的に古い物は出土していない。よって、築造時期は七世紀中葉まで下ってしまう。また、平面プランを見ても無袖形式をとっており、この点に関しては、Aグループとの類似性が指摘できる。^⑥

Cは、玄室長四mを越え、幅も一・八・二mのものであり、この地域では大型と言える石室のグループである。幅の長さに対する割合は、〇・四二、〇・四三、〇・四四、〇・四五と、グループ内での差が小さい。発掘調査された上野山一〇号・一二号墳の遺物からは、両石室について「七世紀前半の築造であり、七世紀中葉に追葬が行なわれた」という推定がなされている。なお、丸ヶ谷三号墳についての出土遺物等は全く不明である。^⑦

Dは、薬師谷二号墳ただ一基だけであるが、他のグループの一部と考えることがどうしてもできなかったので、一つのグループとして位置づけた。すなわち、玄室長が六m以上もあるのに対して、幅は一・九mしかなく、特別に細長い玄室と言える。立地場所も、標高約百mというかなり高い位置である。このように、薬師谷二号墳の石室は、この地域では個性の強いものと言える。

以上が各グループの概要である。

ところで、Aグループの石室は、その規模から考えて追葬は難しいと思われる。特にユガミ谷三号墳などは、県下でも最小規模の横穴式石室に属する。これは、明らかに最初から「単葬」を意識したものであろう。また、これらの石室をもつ古墳は、はっきりとしたマウンドをもっていない。(下名倉五号墳については、発掘調査以前にすでに開墾地となっており実情は不明。)特に、ユガミ谷三号墳、丸ヶ谷A五号墳は、それぞれユガミ谷一号墳、丸ヶ谷A三号墳の墳丘裾部を若干掘り下げ、その中に石室だけ施したような感がある。ひとつの古墳群の中で、わりあいしっかりした墳丘をもつ古墳と古墳のあいだに、小さく簡単に営まれているのである。こういった類の古墳は、内部施設が竪穴式石室ではあるが、名張市尻矢古墳群にも、また、木棺直葬ではあるが、多気郡多気町河田古墳群にも見られる。^⑧

次に石室の幅(正確には奥壁幅)が二mを越えないということに関して考えてみたい。薬師谷二号墳などはもう少し幅があった方がむしろ自然であると言えるのではないか。これは、天井石をのせなければならぬということから、あまり広くできなかった。つまり天井石と

して二mを越えるような石材を確保できなかったという技術的な面の制約が、まず考えられる。また、石室としての安定性の限界がこの幅なのかもしれない。しかし、この玄室奥壁幅の頭打ち現象は、単にそのような技術面の問題だけが原因なのだろうか。何らかの政治的規制が働いたのではないかという推測は滑稽だろうか。

〔II〕

次に古墳群を単位とし、その特徴のひとつとして石室を見てみることにする。ここで、比較のポイントとするのは、まず石室を構成している主要石材の石質である。そして、次にその石材の積み方（特に側壁の架構法）を見てみたい。それは、例えば片方の側壁が一m四方の範囲で観察できれば、資料としてその石室が使えるからである。

さて、実際に表1の八つの古墳群について調べてみることにする。まず、主要石材の石質についてであるが、表1からわかるように、八つの古墳群中、七つまでが粗粒砂岩である。これは、俗に井関石と呼ばれているもので、板状に割れ易い性質をもち、細工もやりやすいとのことである。^⑩

それに対して、小山古墳群では、全く違った石質の石材を使っている。石室の露見している四基の古墳すべてが花崗岩系の石材を使用しているのである。

ここで、この波瀬川流域の地質について考えてみる必要があるが、その説明も『一志町史』^⑪に詳しいのでここでは省く。とにかく、この地域には三ヶ野頁岩砂岩層や井関砂岩泥岩層など、砂岩系の地質が広

く分布している。地質図と石室分布図を重ねてみればよくわかるのだが、小山付近も決してその例外ではないのである。それどころか、地質図を見る限りでは、この波瀬川流域には花崗岩系の石材を多量に産する地域はないのである。にもかかわらず、小山古墳群では花崗岩系の石材を使用しているのである。

ここでは、このような小山古墳群の特異性を指摘しておきたい。次に、側壁の架構法であるが、結論的に、それには二種類が認められる。

ひとつは丸ヶ谷A三号墳や小山古墳群にみられるものであり、六〇×八〇cm、一二〇×七〇cm程度の大きな石を横長に三〜四段積み、その大きな石の間隙には小さな石をつめ込むというものである。栗師谷二号墳もこの部類にはいる。また、ヒジリ谷一号墳も、左側壁では扁平な石材を多少使っているが、右側壁を見ると四〇×二〇cm程度の石が積まれており、扁平感はない。全体的にやや石材は小さいが、この石室も、この部類にはいる。

もうひとつは、ユガミ谷一号墳に典型的に見られるような架構法である。すなわち、比較的大きな石（一〇〇×八〇cm程度）を第一段に据え、その上に扁平な石を数段以上横積みしていくというやり方である。上野山古墳群や下名倉古墳群は、ほとんど底石しか残っていないのだが、わずかに二段目が認められる場所から推測して、やはりこの部類になる。その他、立切一号・二号・五号も、側壁の部分しか観察できないが、やはりこの型式と考えてよい。

さて、この石質と架構法の二つの違いをまとめると、古墳群が次の

ように三つのグループに分けられる。

I ユガミ谷系

II 丸ヶ谷系

III 小山系^⑫

Iは粗粒砂岩を使い、主に扁平横積みするもの。IIは、I同様粗粒砂岩を使うが、扁平横積みはせず、石室内部に石材の広い面を見せているもの。そしてIIIは、使用石材の石質が花崗岩系のものであるということの特徴とする。

このような違いの裏には、当時この地域に住んだ人々の社会的な相互関係がうかがわれる。

(筆者は30期生)

[註]

① 斎藤忠「日本史小百科4 墳墓」近藤出版社 一九七八。

② 森浩一「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地」(『論集終末期古墳』) 塙書房 一九七三。

③ 杉谷政樹「古墳分布より見た地域構造—伊勢平野中南部の場合I—」皇学館大学卒業論文 一九八一。

④ 「一志町史」上巻 一志町役場 一九八一。

⑤ 下村登良男「下名倉古墳群発掘調査報告」一志町教育委員会 一九七一。

⑥ 「上野遺跡 上野山古墳群発掘調査報告」(一九七一)によると、上野山一—号墳は「小石室ともよばれる形式」であるとして

いるが、波瀬川流域においては、まだまだ「小石室」とは言いがたい。

⑦ 下村登良男・山沢義貴・谷本鋭次「上野遺跡・上野山古墳群発掘調査報告」一志町教育委員会 一九七一。

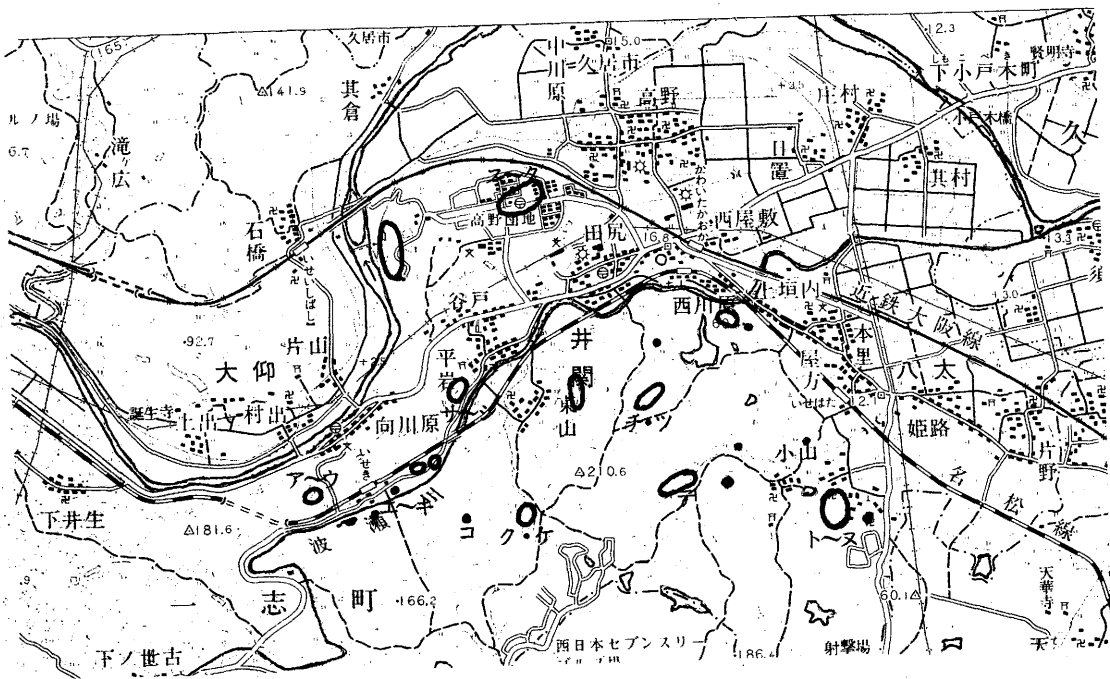
⑧ 「尻矢古墳群現地見学会資料」名張市教育委員会・名張市遺跡調査会 一九八一。

⑨ 吉水康夫「河田古墳群発掘調査報告I」多気町教育委員会 一九七四。

⑩ 前掲⑦

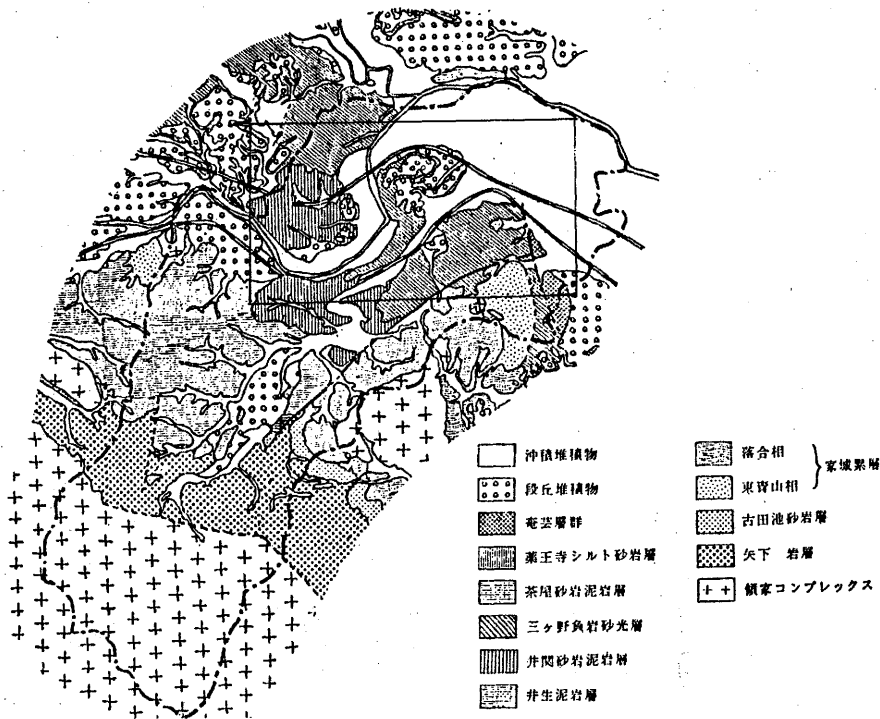
⑪ 前掲④

⑫ 小山系のもものは、一志郡嬉野町釜生田古墳群等にみられる石室との類似性が大きいようである。この波瀬川流域のすぐ南にあたる嬉野町の古墳が、今後詳しく調べられれば、小山古墳群は、その点において、波瀬川流域に位置づけることは不自然になるかもしれない。

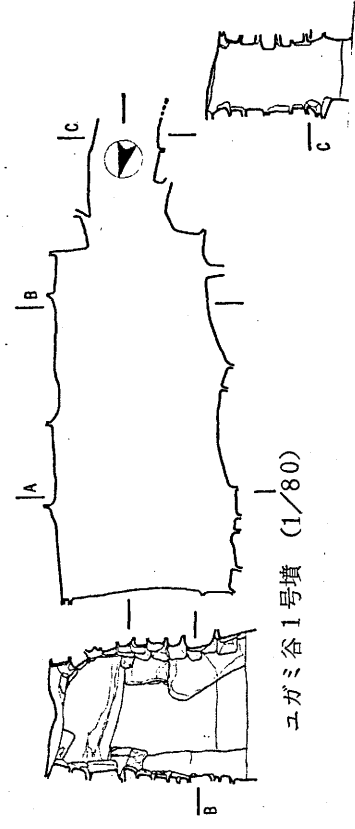
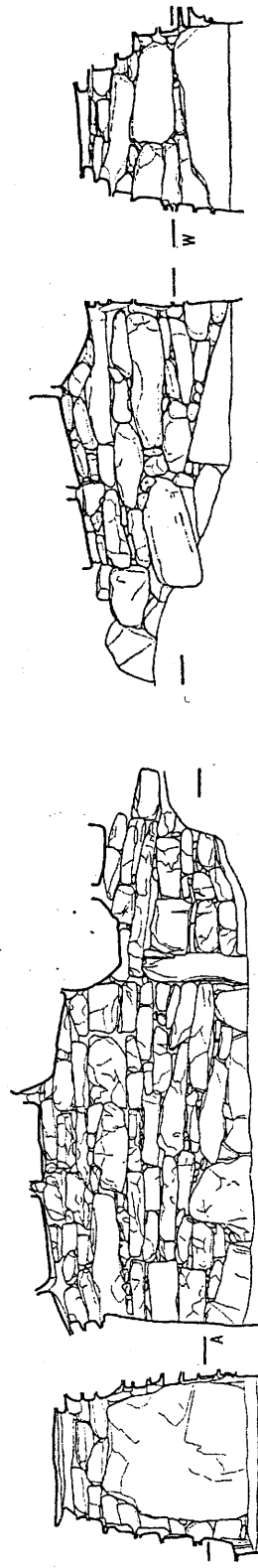


波瀬川流域の横穴式石室分布

1:50000

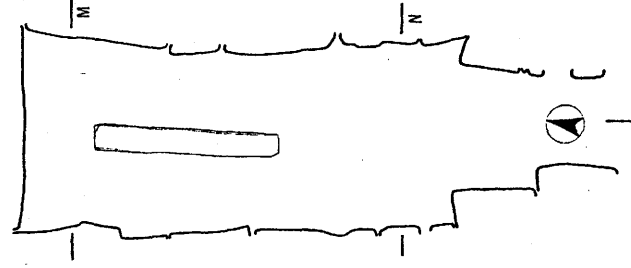
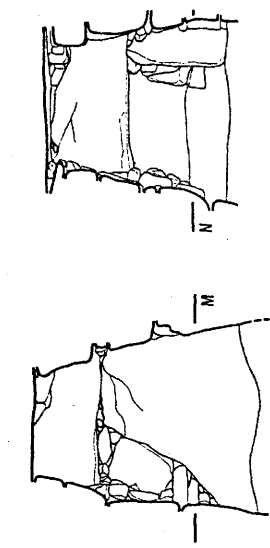
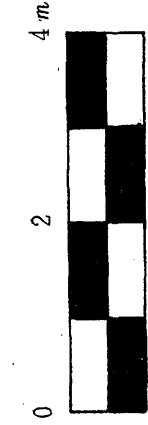
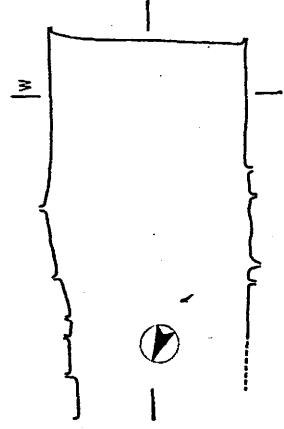


志町附近の地質図 (『一志町史』上巻P 40より)

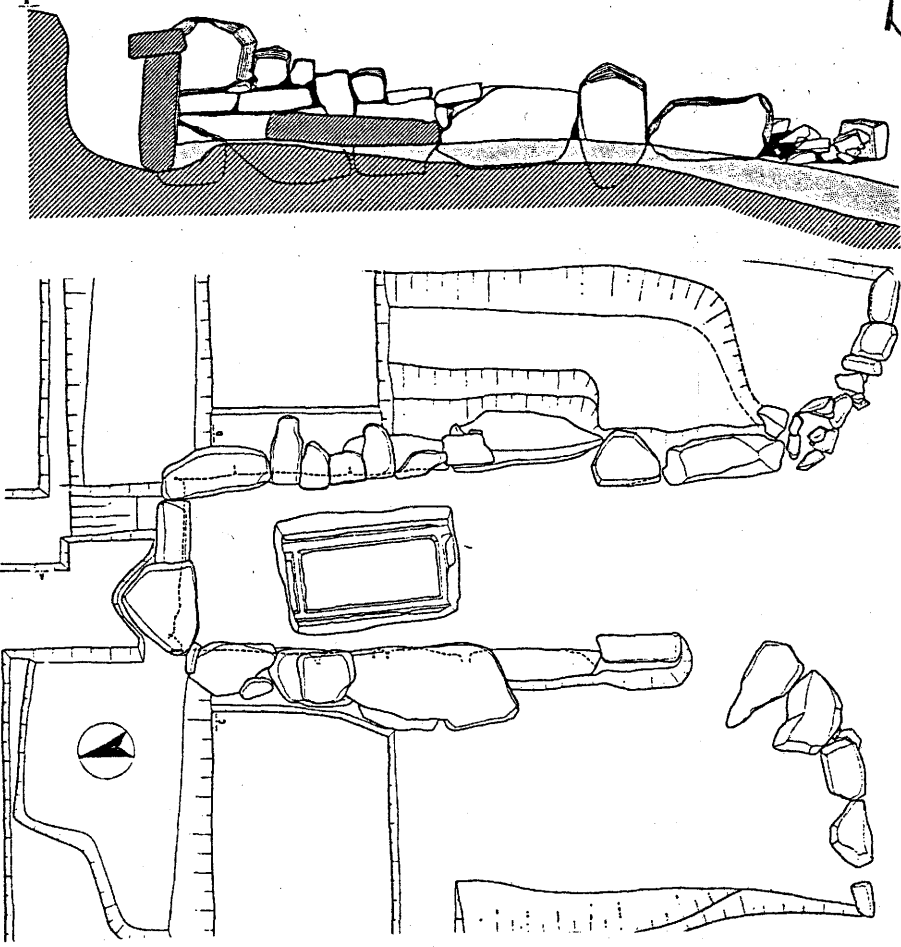


ユガミ谷1号墳 (1/80)

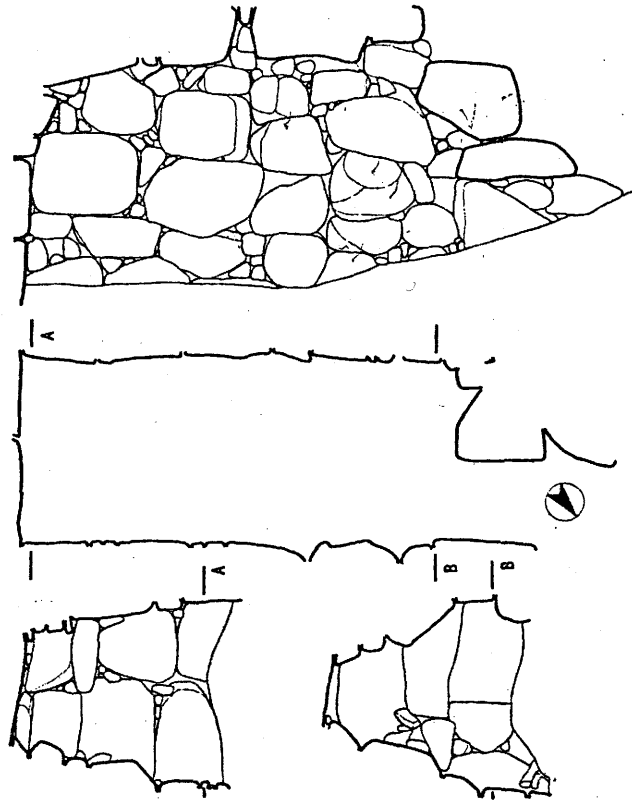
立切5号墳 (1/80)



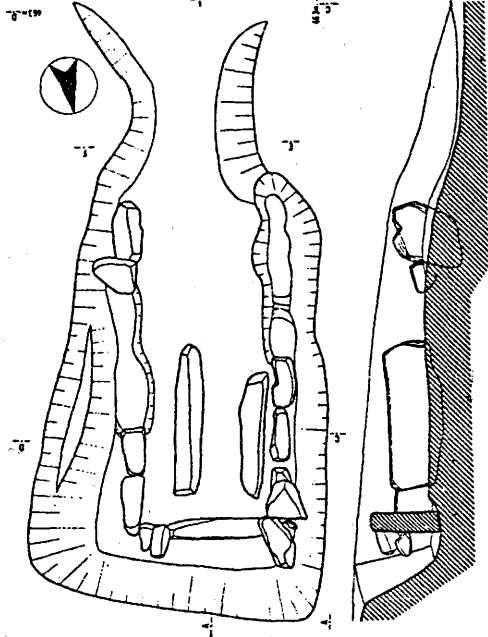
丸ヶ谷A3号墳 (1/80)



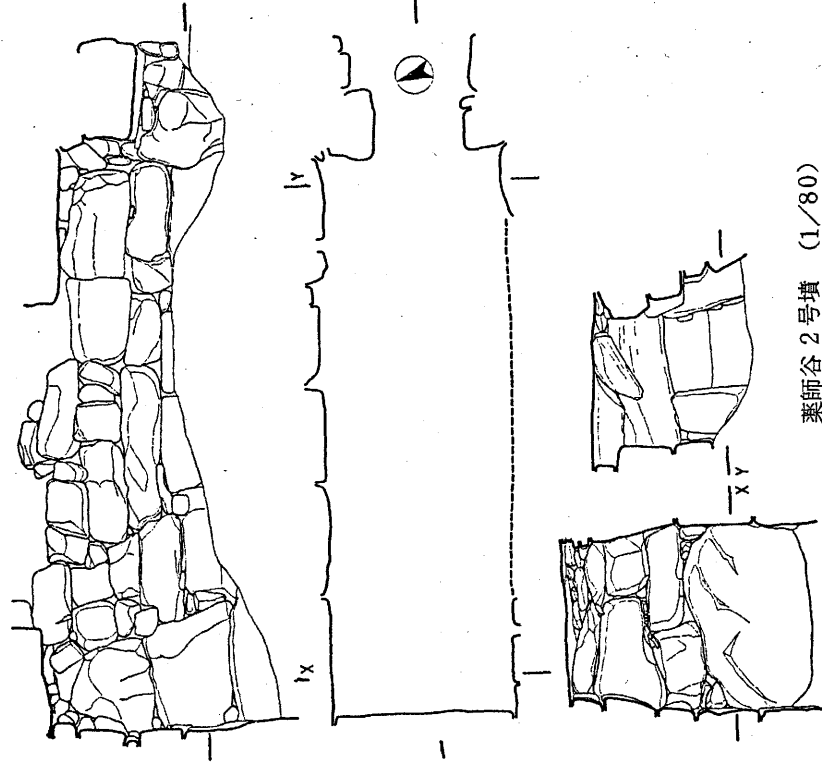
上野山10号墳 (1/80)



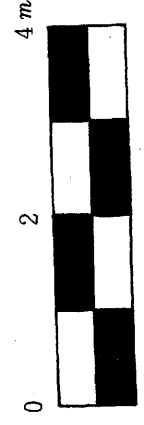
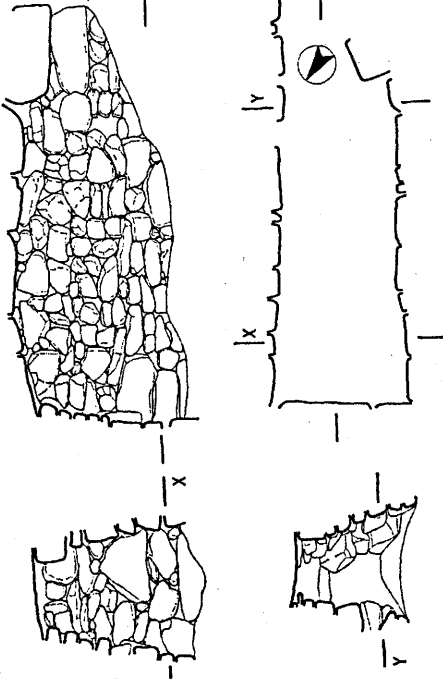
小山A1号墳 (1/80)



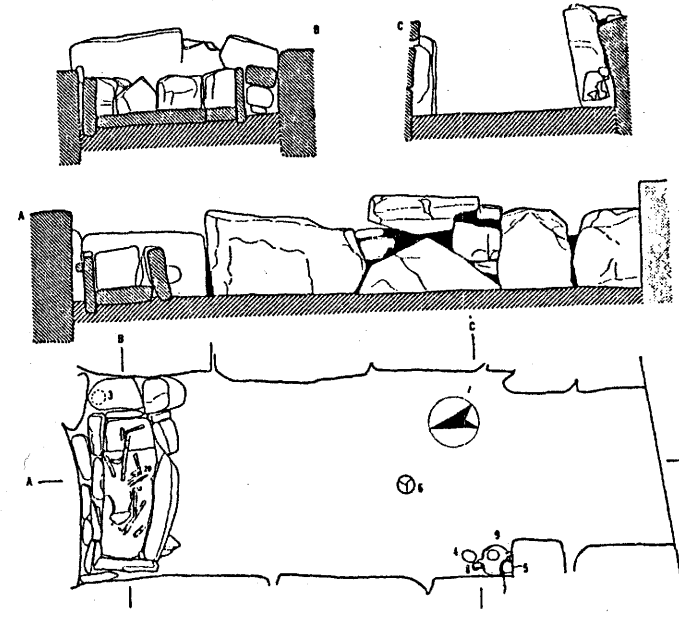
上野山11号墳 (1/80)



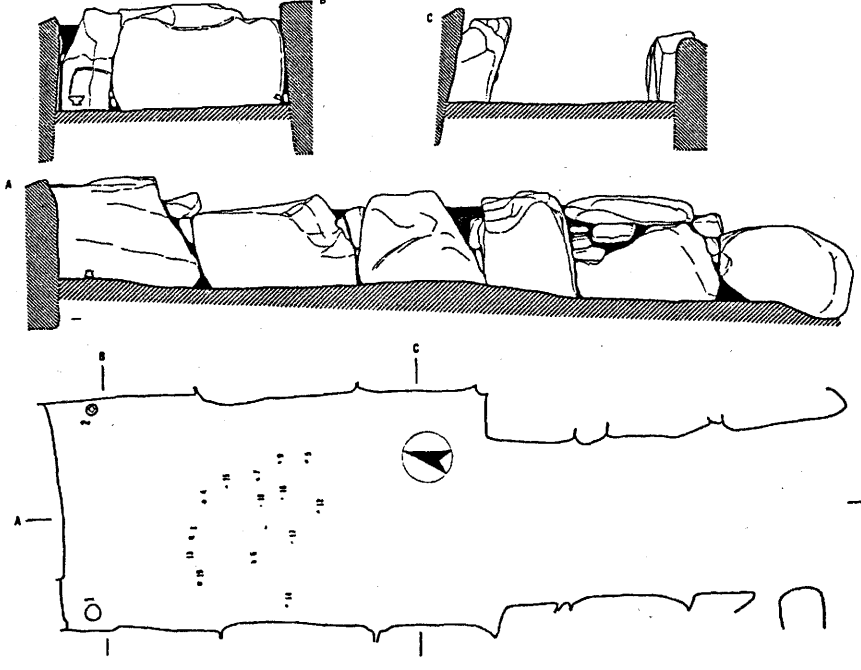
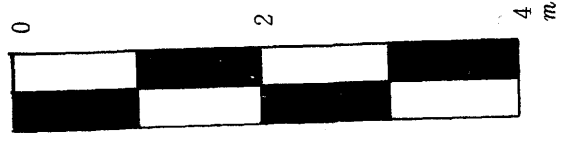
ヒジリ谷1号墳 (1/80)



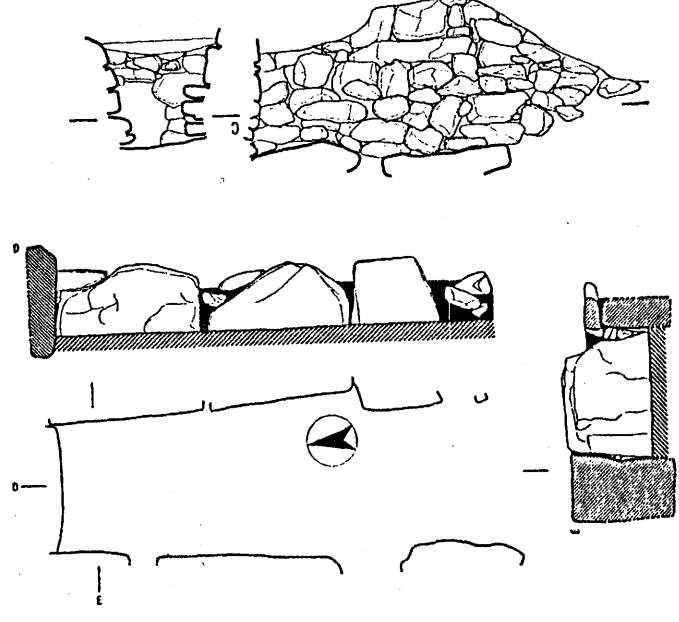
栗師谷2号墳 (1/80)



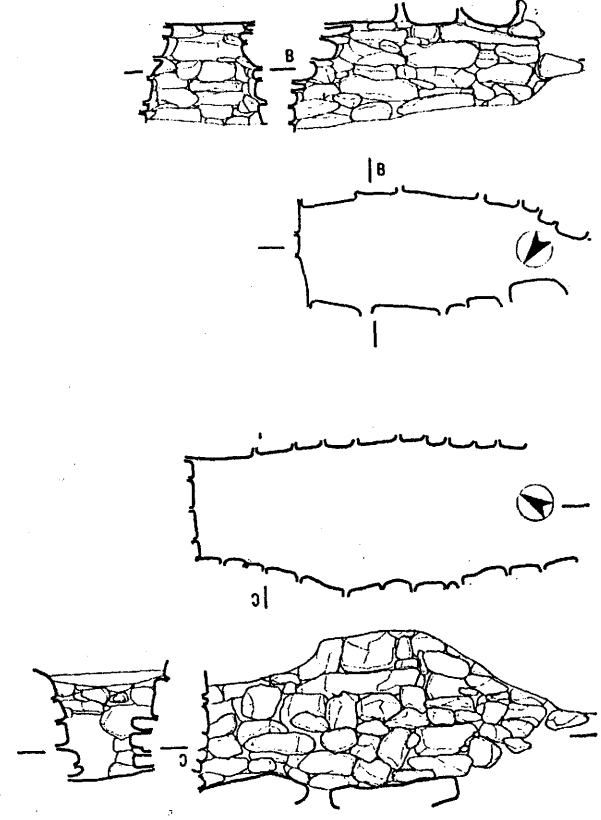
下名倉4号墳 (1/60)



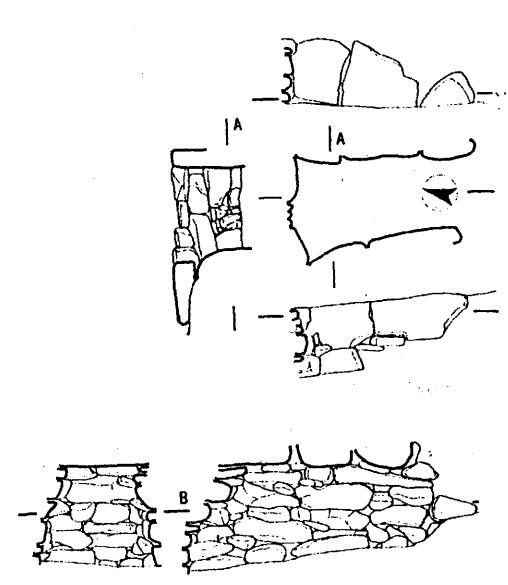
下名倉3号墳 (1/60)



下名倉5号墳 (1/60)



栗師谷6号墳 (1/60)



丸ヶ谷A5号墳 (1/60)

ユガミ谷3号墳 (1/60)

(『一志町史』・『下名倉古墳群発掘調査報告』より)